

「ジョイント栽培」によるなし早期多収技術の実証

要約

「ジョイント栽培」は同樹齢の慣行仕立てに比べて、植付け3年目から収量を上げることができ、にっこの10a当たり換算収量は1.3t/10aであった。

○ 展示のねらい

「ジョイント栽培」による早期成園化技術の定着を図るため、本県育成品種にっこの植付け3年目(結実1年目)における果実品質、収量性及び省力化を検証し、同栽培法技術の資とする。

○ 主な成果

表 ジョイント栽培の植付け3年目(結実1年目)における着果数、果重、収量および果実生理障害発生程度

処理区	着果数	10a当たり着果数 ²	果重	1樹当たり収量	10a当たり換算収量 ⁷	果実生理障害(発生程度) ³	
	果/樹	果/10a	g	kg/樹	t/10a	みつ症	水浸状障害
供試区	16	1,776	722	11.6	1.3	0.0	0.0

²10a当たり着果数は1樹当たり着果数×栽植本数(111本)で算出した

⁷10a当たり換算収量は1樹当たり収量×栽植本数(111本)で算出した

³みつ症は慣行により0:無~3:多に、水浸状障害は0:無、1:1~2個、2:3~4個、3:5個以上に分類し、 Σ (発生程度×発生果数)/(調査果数)で算出した

にっこの植付け3年目(結実1年目)における果重は722g、10a当たり換算収量は1.3tであった。果実生理障害のみつ症および水浸状果肉障害の発生はみられなかった。

作業性等の聞き取り結果では、ジョイント前(接ぎ木前)の苗木養成に労力を要するが、ジョイント後(接ぎ木後)は作業の移動が直線的になるので、慣行仕立てに比べ各管理作業が短縮され、雇用費のコスト低減につながる。また、摘果等の作業の見落としが少なくなり、作業効率があがる。

○ 今後の方向性

ジョイント栽培は慣行栽培に比べ早期から収量をあげることができることから、改植および新植での早期成園化技術として推進を図る。

同栽培は早期から収量を上げることができるが、品種、樹齢及び樹冠の拡大等に応じた着果管理の目安が必要である。

実施機関：河内農業振興事務所経営普及部 実施場所：宇都宮市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315